

電「四注」
四注
小持
名

透 1182 羽鞘 968

3,700-1/3

百利 19-442
3679 21190
1580-7/4

玉虫の羽衣 Sfil 3699 遺物 1/4
4588 1382
3974 15

玉虫厨子
大極殿など
の斗拱は
現代
と推測させる雅やかな遺物を
においても見ること出来る。
それは、法隆寺に伝わる宮殿型の厨子（仏
像や舍利または経巻を安置する仏具）で、
玉虫厨子と呼ばれるものである。（写真図版 659 参照）
この厨子は、天平十九年（七四七）に朝廷
へ提出された日法隆寺伽藍縁起并流記資財帳
に記載されている。日宮殿像二具のうち、金
泥押出千仏像を有する一具に当ると解されて
おり、その装飾の透金具の下に玉虫の
羽鞘を伏せているところから、日玉虫厨子
と称される。
この玉虫厨子について、次のように言われ
ている。
「建築史的にも、絵画的にも、玉虫厨
子は、きわめて貴重な遺品で、四注を加味し

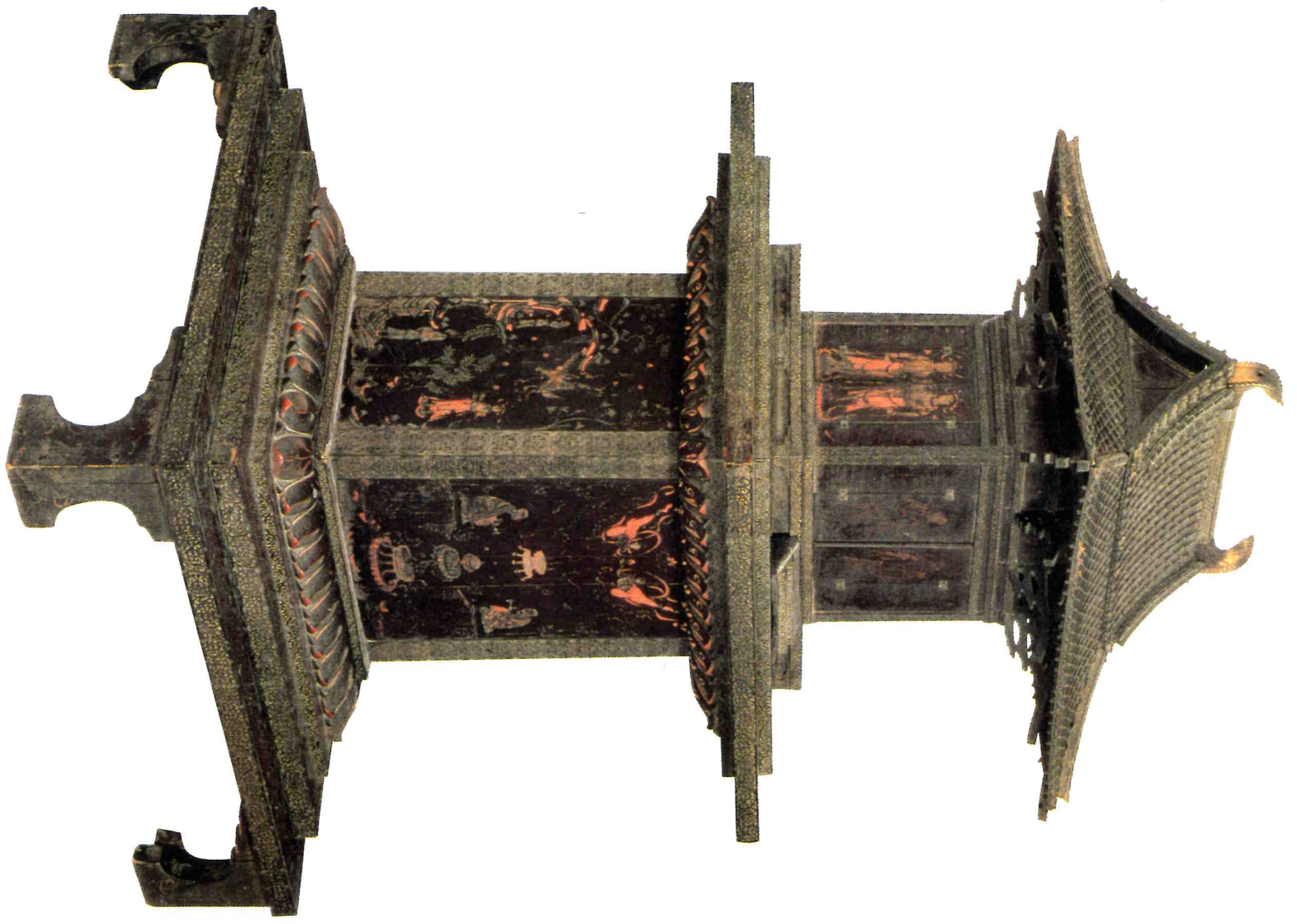
3702-1/2
5-6
小極殿の宮殿

造

・カラー
 右面の全面
 上下にわたって
 隈取一杯におお
 えてて掘裁
 下をい

3,700^p - 2/3

・若作梅詩話は
 不要だと思っ
 ます。



③3836^p-2/2 ③3973^p18^頁 ③3978^p3/3 4^頁 ③4414^p13^頁 292^p

1304

1404

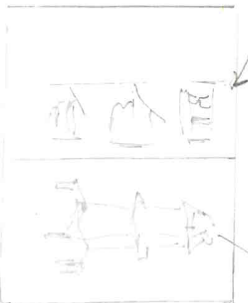
写真図版 659 王虫厨子

飛鳥時代(7世紀) 国宝
 聖真提供: 小笠原館

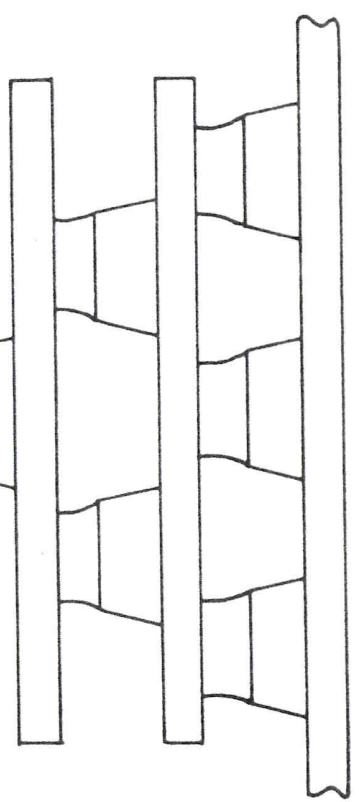
法隆寺千四百年 高田良信 新潮社 1994年11月25日発行 103頁 参照

・木造 漆塗 彩色 総高226.6cm 周縁に張, 大透周の金具の下に 王虫の羽を
 数く

左側の右半分
上Fにわたり
腰板一杯はみ
出させて作かい。



傾

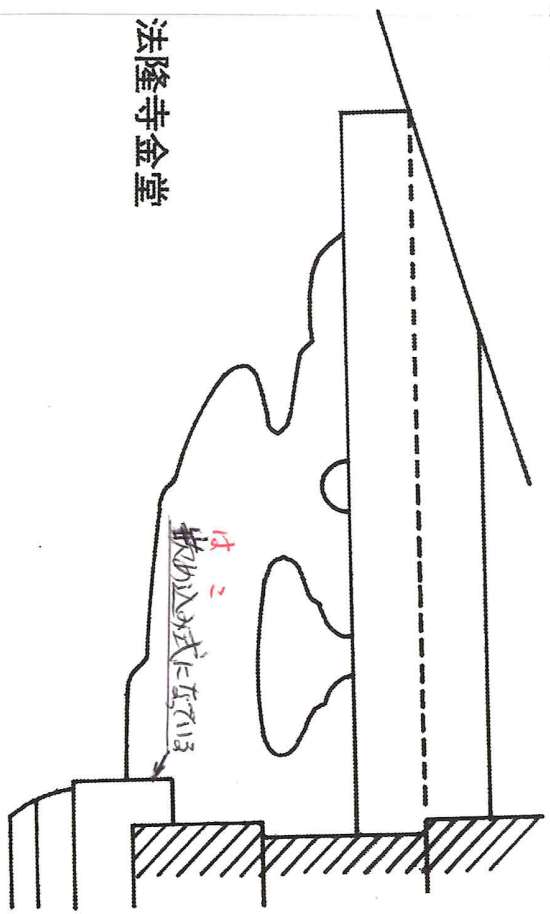


上Fに合わせた太いゴツ
漢代灰陶楼閣

漢代灰陶楼閣

3,700 P-3/3

文字の頭を揃えて下さい。



法隆寺金堂

はこ
板の入り口式に示している

293 P
2693
3/3

玉虫厨子 (写真図版659上層部、左端)



板の入り口式に示している

年代(1)
101頁
同四

1304

1404

第455図

聖形斗拱の形式(筋周りを省略)

聖徳太子 上原和 講談社 昭和62年3月10日発行 94頁参照

再建では無い
改訂475頁

複製 ③ 3663¹
③ 3664²
③ 3686³

③ 3703 1119
この時

③ 3662¹ - 1/2

3,701 P

前記の通り ③ 3704² - 1/3 475

③ 1580¹ - 1/4 475
③ 1580² - 3/4

③ 1580³ - 3/4 飛鳥時代 ③ 37¹
③ 4588¹ 百科 ③ 442¹ 朝古朝新後の時代

た入母屋式の屋蓋、行基葺と呼ばれる瓦のふ
き方、法隆寺金堂に見らるのと同じような
雲形肘木など飛鳥建築の特色をよく示してい
て、あたかも当時の建築のひな型を見るよう
である。第455図
という。『世界大百科事典』平凡社、へ玉
虫厨子✓参照。第二十二章『新城築城』の項
において既述）
＊
以下、参考までに、思うところを述べてみ
たい。
■先に述べたが、
へ推古三十年（六二二）正月二十二日、大
子（病床につかれ、このとき王后・王子および
諸臣が発願して釈迦の像（釈迦三尊像）を造
ることになつた）
という。（『釈迦三尊像』の光背銘参照）
■恐らく、その際、
へ釈迦三尊像の複製品を造るだけでなく、
同時に、『斑鳩寺』（現法隆寺）を建
立しようということになつたのであろう。

上部は切妻のよう（二方へ勾配を有し、下部は寄棟造のよう（四方へ勾配を有する形式））

と思われ。 (第十七章へ斑鳩寺 (現法隆寺)
て特異な構想の項において既述)

なおり、もーかいたら、

へこの日斑鳩寺 (現法隆寺) の金堂の再

建にたずさわった者達の中に、小墾田

宮の宮殿造営を手かけた人物が居たのではな

かううか

と想像される。

そこで、

へ当時の宮殿の軒下を飾っていた雲形斗拱

と全く同じような斗拱か、

現法隆寺の金堂の軒下にも取り付けられ

たのであろう

と推察される。

法隆寺金堂の雲形斗拱は、屋根

の大きさおよび瓦の重量を考慮せよに、

小墾田宮の宮殿の雲形斗拱と同じ程度の強度

とされたようである。最上部の屋根自体の

法隆寺金堂の大きく張り出した屋根重量

を支える為、支柱によって軒隅を支えなけ

による破損を避ける為

の極め

3668-1/2 S. 62, 12, 21 H 11. 8. 31 ⑤ 3702P-2/2
 H 5. 1. 31 H 28 (2016) 9. 10
 H 8. 11. 15 ⑥ 3604P-3/4

⑤ 3668-1/2
 4行
 について✓の項参照

水ばならな^{かつ}と^なかたし
 という。⑤真図版⁶⁵³へ法隆寺の金堂^{こんどう}参照
 支柱は、金堂完成後間もなく、はやくも必
 要になつてゐた、というのか今日の一致した
 見方である。(「聖徳太子」上原和、講談社
 九一頁参照)
 ④なお、元禄年間(一六八八—一七〇四)の
 金堂修理時に、竜巻がき付いてゐる支柱に変
 更されたようである。⑤真図版⁶⁵³「法隆寺金堂壁画」法隆
 寺「朝日新聞社」一九九四年一月一日発
 行「七五頁参照」
 薬師如来像と釈迦三尊像の製作年代(再整
 理)
 ④ともあれ推古朝の末年以前に、斑鳩寺(現
 法隆寺)は造営されたと解される。
 ④↑↑重複するが、天智朝の二つの罹災記事
 に関し、今いちど述べることになり。(第
 七十章へ西の法隆寺、東の斑鳩寺)
 へ(現在の)日釈迦三尊像に似たどつた経緯

⑤ 3693-1/3 法隆寺の金堂
 ⑤ 3693-1/3 法隆寺の金堂

45.2.3(水)④
紀下374 ③3673
③3607

3,703 ④3/71

紀下373 ③3673
重後1458
四火 災害をうけること
り さいち3896-3/2
元 2312 ③3711-3/2

葉師如來像と釈迦三尊像の製作年代について(補)
重複するが、天智朝の二つの罹災記事につ
いて、いまいちど述べることにしたい。
天智紀八年(六六九)是の冬条に、
「時に、斑鳩寺に災けり」とある。
何が焼けたのか全く記述されていなか、
恐らく、大和国の斑鳩寺(現法隆寺)の
講堂や回廊北半部が焼失したのであろう。
また、釈迦三尊像の日光背先端部が損
傷が生じたのも、この時のことなのであろう
と思われ。この時のことなのであろう
と、その翌年の天智九年(六七〇)四月
三十日の夜半之後に、用明上皇の爲に建立さ
れた大倭国(肥後国)の法隆寺が、
聖徳太子の御心にいたかつて、心ならず
も茶毘に付され、炎上したように推察される。
天智九年四月三十日の夜半之後に、法隆
寺に災けり。一屋も餘ること無し。大雨
雷震る。

新刊(1)-247下

→H52.4(中)⑤

③668-4/4

「小冊」85下

③608-4/4

予言 2276
諸原上 11412 61

新刊(1)-247上
③704-1/3

同又 ③608-4/4
④4750

てつてけい
徹底的
元1529

こうきやう
号延 132

③673-3/2

美つ

寺地が分からなくなりました、などとは考えにくいように思われる

とある。(紀)
法隆寺に火が放たれ燃え上がった炎(災)は
哀しく美しく夜空を焦かし、一つの屋さえ
余さず焼き尽したのであろう。第448区法隆寺炎上
天は、悲しみのあまり、大雨を降らし、雷
のような音をたてて号泣したのだろうか。
大倭国(肥後国)曰法
隆寺の焼け跡あたり一帯の地勢をすっかり
様子が違うようになるまで徹底的に変えら
えてしまったのかも知れない。
先に述べたように曰上宮聖徳太子
記に、
「斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地、故百
済入師率衆人合造葛野蜂岡寺、今逢川内高井
寺云々」
と記されている。
補闕記にいう曰斑鳩寺は
の曰斑鳩寺(若草伽藍)のことでなく
大倭国(肥後国)の曰法隆寺のことを指して
大和国の
大和国の曰斑鳩寺が焼失して、その後、

参照

かはち 川内 ④3474^{2/3} 紀下180¹ ⑦3608¹ - ④3608¹ 4/4
 ④3608¹ 4/4 「小町」85¹
 衆人 衆徒 小林868¹ 3704¹ - ④3608¹ 4/4
 「小町」85¹ 所田197¹ 上厚和33¹
 「小町」85¹ ④3608¹ - ④3608¹ 4/4
 「小町」85¹ 同文

寺地が分らなくなっていました。なびと
 ことはないうように思われる。第七章へ西
 の日法隆寺は、東の日斑鳩寺の項におい
 て既述
 この物語にありては、上宮聖徳太子伝補
 關記の当該記事を、こう解釈してみたい。
 (1) 天智九年 大倭国(肥後国)の日法隆寺
 は火がつけられて一屋も餘ることなく焼失し
 (2) 日法隆寺は炎上した後、その証
 拠を残さない為 焼け跡あたり一帯の地勢
 を様変わりさせてしまった。
 はすっかり様子が違うまでに変えられてしま
 った。
 (3) もはや衆人(世間の人々)は、寺地を定
 め得なかった。そこに何かあったのか、誰
 にも分らないままになってしまった。
 (4) そこで寺地の改変作業にたずさわって
 いて、それを済ませたからであらうか。白脊
 の入師は、衆人を率いて、葛野の蜂園寺(京都
 広隆寺の前身の寺)と川内の高井寺を造った
 云々
 (多くの入)

3,704^p-3/3

入 小林カノ
大カノ
「入師」無し

39^p 4126/2 ⊕
大カノ
小林 無し

といったことが記されているのだ

という意味なのであろう、と推察される。

■ 因みに述べると、

△ 曰 百口には、「すべて」という意味があ

る ✓

という。△ 漢和辞典に長澤規矩也、三省堂

△ 白 ✓ 参照

■ もしかしたら、

△ 百済入師には、曰すべてを済ませた

入師という意味合いが、のではなからうか

と想像される。込められている

*

用明上皇の御爲に造られた大倭国（肥後国）
 法隆寺の本尊は、薬師如来像は、
 瀬戸内海を渡って、大和国の「斑鳩寺」（現
 法隆寺）へと、鄭重に運ばれていったのだろ
 う。
 予て、この「薬師如来像」は、
 予め定められていた通り、大和国の「斑鳩
 寺」へ現法隆寺の金堂内の東の隅へ移し置
 かれたのであろう。
 こうして、ようやく、現法隆寺
 金堂の中の隅に、斑鳩寺の根本本尊である
 「釈迦三尊像」
 東の隅に、法隆寺のもともとの本尊であつ
 た「薬師如来像」

タイロ 3659
3710 3719 3721 18
3664
天つき
政行

推古31年 15年 16年
3718
3,706^P - 1/2

町田 97
97~98
町田 92
97~98
288°-1/2
4350°
法隆寺と阿彌陀佛
とも呼ぶ。

西の間に、口阿彌陀佛
加揃って安置された、と想到される。(写真
図版) 法隆寺金堂内陣参照

現在

もつとも、専門の美術史家の多くは、
「葉師如来像の製作時は、釈迦三尊像より
新しい」と考えている。
両者を比較してみると、葉師如来像の方が

釈迦三尊像よりも、表現が柔らかく、優しく
造られている。つまり換言すると、葉師如来像よりも、釈迦三尊像
たとえば、葉師如来像は、頬が丸味を帯び
ていて、頸と胴との連絡が自然であり、手の表現
も、だいたいが厚実的で、衣褶(衣のあわせ)ことに
懸裳の部分の褶襞処理や襟の表現、襟合いに
の、よく裾の結び目のあらわし方など、とうて
い、釈迦三尊像より、十六年も古いころの作品
とは考えられな、という。「法隆寺」

町田甲一、時事通信社、九二頁、九七頁、九八頁参照
釈迦三尊像の方が、葉師如来像よりも硬い
というのである。

再整理 3702^P-3/2 12行

3,706^P-3/2

町田 99^P 2行
天竺改行

あるいは、次のように解釈すべきなの

か
重なるもの

*

時事通信社、九二頁、九七、九九頁参照

古様であるという。(「法隆寺」町田甲一)

また、薬師如来像の鼻や唇の感じも、より

古い感じを示している。

に近い紡錘形を呈する釈迦三尊像の眼より

厳格な同じ弧を描いており、涙滴形(杏仁形)

特に、薬師如来像の眼は、上瞼と下瞼とが

ない点がある。

釈迦三尊像よりも新しいとはかりは言い切ら

ない点がある。

一概に、薬師如来像の方が

は

天の字
改行

可(1991)
後当 340

427106 3896 全ルビエフ70417.1.9(田)
P 188 彼是 大カンワ8 OK 作 止し 町田65P
3.707 仁の便と江の村 366 1P 32 大カンワ966P

ではないうつな
かぬ知れないう
(以下 巻頭の第10表参照)

①推古十五年(六〇七)に、大倭国(肥後国)の法隆寺の本尊として、薬師如来像が完成

した。(薬師如来像光背銘参照)

・なお、兵田耕作氏は

「推古天皇三十一年癸未に作られた釋迦三尊に、鞍首止利佛師造」と明記してあるのに

比較して、彼是其の様式を殆ど同うしている

から、薬師三尊も同じく止利佛師の作である

うと考へられよ。——同じく鳥佛師は元興寺

の大銅像を勅命によって造り、其の功によつ

て天皇から賞賜を受けている處から見ると、

當代第一の技術家に違ひ無い。太子が此の薬

師三尊を用明天皇の爲めに造立せられたに際

して、必ずや當代第一の技術家を選ばれたで

あろうし、彼以外に當時同等の作者が他に存

在してゐたとは考へられなから、矢張り此

の三尊も鳥の作とす可きが穩當であらう

といつてゐる。(「法隆寺」町田甲一、時事通

信社、九四頁参照)

$$\textcircled{+} 3617^{\circ} - \frac{3}{3}$$

コクヨ ケ-~~40~~ 20×20

新やのー2406上 1397~
拾う元1906'
3664'

亀井 223' 町田 65~66'
藤原工 3999'

3.709^P-1/2
[割注] 2行書きに17 同
おいて下さい
新やのー2406上 3706'-1/2

新やのー2406上
11町78'上
3715'右
3706'-1/2左

管さ小ていた日 釈迦三尊像の焼けた破片を
⑤ 象光背銘参照
若草伽藍の灰燼の中から拾い集められ、保
釈迦の像をつくることになった。(釈迦三尊
・その中で、王后・王子および諸臣が発願して
ともにならんので、病床につかれ、まっ
か、妃の膳、苦支々美郎女も病に倒れられ、
に聖徳太子が発病され、さらに看病疲れから
④ さて、推古三十年(六二二)正月二十二日
水る
持った顔には、損傷がなかった(ように推察さ
・だが、靈妙なことに、涙滴形の眼を
「薬師如来像は、釈迦三尊像よりも表現が柔
九七九八八負へ、薬師如来像は、いつの説明
ろ う。法隆寺、町田甲一、時事通信社
粉々、に毀れ、どこかへ飛び散っていたのであ
の飛天は、高熱と落下物の衝撃によって脆くも
光背の外周縁に取り付けられ、いた透し彫り
さ え、定かでないくらいボロボロとなり、大
れ、襟もとや懸裳(たれたスソ)の部分は大形

③3664' 和 銀い
③3706' 1/2 硬

大カニワ 2323
鑄 吳漢 (人)
ス

3709^P-2/2

ニ

新(1)-240頁上、14行へ

法隆寺	町田甲一、	時事通信社、	九七、九	る。	（一）日本	の歴史	（2）読売新聞社、	三九頁	迦三尊像	の方かす	と鋭く硬い	感じに見え	いる	薬師如来像	と比べ	てみる	とき、	日釈	な	お、た	った	の一回	できれ	いに	鑄上	が	つ	て	れる。	倒な	鑄	つぎ	の工法	が採	扱	され	た、	と解	さ	け忠実	に再	現	し	よう	と	し	て、	こ	う	し	た	面	日釈迦三尊像	の	も	と	も	と	の	形	態	を	出	来	る	だ	聖徳太子	の	深	い	信	仰	心	の	象	徴	と	も	い	え	る	難	だ	つ	た	の	だ	う	。	現	存	す	る	日釈迦三尊像	の	内	部	に	は、	何	回	も	へ	鑄	つ	ぎ	を	繰	り	返	し	て	作	ら	れ	た	あ	と	か	残	っ	て	い	る	。	焼	け	た	破	片	を	基	に	し	て、	新	た	な	像	を	造	る	の	い	う	こ	と	は	鑄造技術上	か	え	っ	て	非	常	に	困	る	。	も	っ	と	も、	斑鳩寺	当	初	の	日釈迦三尊像	の	さ	れ	て	い	っ	た	の	で	は	な	か	う	か	。	作	る	為	、	何	回	も	何	回	も	へ	鑄	つ	ぎ	を	繰	り	返	さ	す	基	に	し	て、	原	形	と	そ	っ	く	り	同	い	尊	像	を
-----	-------	--------	------	----	-------	-----	-----------	-----	------	------	-------	-------	----	-------	-----	-----	-----	----	---	-----	----	-----	-----	----	----	---	---	---	-----	----	---	----	-----	----	---	----	----	----	---	-----	----	---	---	----	---	---	----	---	---	---	---	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--------	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	-----	---	---	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ニ

3,710[°]-1/4 ^{81W} ③3659[°] 田月66 前14年解され
 ③3662[°]-3/2 9行 ③3664[°]-1/2 葉師如事は連絡が自然 ③3664[°]-17行
 「小町」78[°] 由3706[°]-1/2 乗らな 13行

③3664[°] 末行「塔のあま」(八景)

ハ頁へ他参照(既述)
 恐れらく、この鋭さや硬さも、再造の際の困
 難の大きさを物語っているのであらう。
 ・また、焼けた破片のつなぎ目の部分が、何
 となくぎこちなく見えるのも、いかたのな
 いことだつたろうと思われろ。
 ⑥ともあれ、――翌年の推古三十一年(六二
 三)三月半ばになつて、件の釈迦像は両脇
 侍や莊嚴具もつくりおえて完成された。
 (第七十章へ釈迦三尊像の項に

おいて既述)

*

3.710 P-2/4

改正(た) 413.5.2

Sfile

3.710 P-3/3
#032 340 F
「小町」35-27

「ここ」3718
「て」3716
「小町」38下第45行

大和国の(現)法隆寺の昭和資財帳づくりのため、平成元年暮れに、釈迦三尊像の

如来像の内部や、台座が調査された。如来像の内部に蟬で原型を作り、銅を流し込ん

で作られていた。肉厚は釈迦像が一・二・一・六

セシ、薬師像が一・ハ・一・一・一。外見上の違

製造過程でできる「型持痕」と呼ばれる穴跡が

二十五ヶ所で見つかった。その穴埋めに、と

かいた銅を新たに流し込む「鑄かけ」の方法

がとられている所が三ヶ所、銅板をはめ込む「う

め金」の方法の所が二十二ヶ所あった。光背

と本体をつなぐために設けられた「ほぞ」の

一ヶ所からは鑄損も見つかった。釈迦像の本体・光背・台座は組み合わせ形

sfid3710-3/3

3,710^P-3/4

「小町」35-28
「小町」29上
3月19日 1934点
新や(1)-24上

心
Telに確認後。
「一」次頁

●その点、薬師像には、鑄損した部分はなく、
「型持痕」の穴うめにはすべて「うめ金」の方
法が取られていた。台座の削りも設計通りで、
最小限だった。
■西川杏太郎・奈良国立博物館長は、
「釈迦三尊像の方が大きいために難しかった
合をみると、釈迦像には仏像製作初期の試
行錯誤の様子がまざまざと残っており、薬師
像からは技術の慣れや要領のよさがかうかがえ
る。
共同止利派の作品であることから、釈迦像
を鑄造した際の経験や作業手順を生かして薬
師像を手かけた可能性が高い。
奈良・法隆寺金堂に安置されている国宝
日釈迦三尊像は、向かって右隣の国宝日薬
師如来像より古いという定説が、鑄造技術
の上からも裏付けられた。
という。「朝日新聞」平成二年三月十一日
付■法隆寺金堂の釈迦三尊像、鑄造技術で

上り1272, 下り1272
 要領 2274 未読 2111
 「小町」79下 新(CD)-24下49人

$$\begin{array}{r} \uparrow \\ 2131^0 \\ -416 \end{array} \quad 311$$

小册 80 138 $3515^D - 1/2$ 312

③3719-3/3 未3行
 「小町」35-3/3
 ③3719-3/3 未2行
 だが③3713
 3,711 P-2/3
 ③3719-3/3 6行
 「小町」80°下
 ③3708
 ③3617-3/4
 新ヤ(1)-242°上未2行「新」

か。第七十章へ元興寺建立の項にお
 いて既述。
 ところか何と、数日後の推古十八年四月三
 十日夜半に、斑鳩寺(若草伽藍)が炎上して
 まい。曰釈迦三尊像は未だ目も開かぬ
 うちに(開眼会もすまないというのに)焼けてしまったように思われる。
 かし、その破片をもとにして、推古三十
 一年(六二三)三月半ばに、曰釈迦三尊像
 が復元されたのであろう、と推察される。
 ❶製造技術の未熟な曰釈迦三尊像に比べて
 技術の慣水や要領のよさが曰薬師如来像に
 うかがえるように見えるのであろう。
 ❷だが、曰薬師如来像よりも、ほんの数
 年のことなから後で作られた曰釈迦三尊像
 の方が、多少技巧上優れているのかも知れな
 い。
 ❸とはいえ、両像の間に様式上大なる差違は
 ないといえるほどのものなのであろう、
 と想像される。

タイム
 ③3615
 P-1/6

③3632
 ③3626
 (タイム)

若草伽藍

複製 1929

3.7.11 - 3/3

「小町」81P において
「当初」の「と」をいっている

「小町」80P 下
新巻の242頁下末5行へ

37031号

複製
から、

と考えた。 (既述)

一年(六二三)三月半ばに完成した、

③当初の「釈迦三尊像」の焼けた破片を基に
して複製された「釈迦三尊像」は、推古三十

の金堂内に安置された。

あり、当初の「斑鳩寺」(若草伽藍)

誕生会

②当初の「釈迦三尊像」は、推古十八年(六
一〇)四月八日の花祭りの日にはほぼ完成して

に完成した。

①「薬師如来像」は、推古十五年(六〇七)

この物語にありては、

かなされてゐるわけである。

ろ、観念の相違によつて、全く正反對の解釈

まごまご述べてきたように、「現」現在の

の製作時期の前後関係について、「今」今までこ

ともあれ、「薬師如来像」と「釈迦三尊像」

H30 (2018) 9.22(土) ~ 9.24 (4日)

→ H.S. 2.7 (田) ⑤ 法隆寺完 罷り間違
S62.12.31 天つぎ 改行 元 2067

田田155¹未行
上巻 137

→ 前頁

なお、天智九年四月三十日夜半え後の日法
隆寺に四罹災のことについて正史である日
本書紀にそのようにはっきり明記されて
いるにもかかわらず、……天平十九年の日資
財帳にをはしめ、法隆寺自体の寺の古記録や
関係する諸文献にも、まったくふれられてい
ない。このことが注目される。(「法隆寺」町田甲一、
時事通信社、一五五、六頁。「聖徳太子」上
原和「講談社」一三七頁参照)

また、斑鳩寺(若草伽藍)天智九年に焼失して
いるというのに、「天智九年に焼失した」とは書
きにくかったのであらう。

年にな上したなどとは、罷り間違つても書
すわけにいかず、日本書紀に以外史の編纂
者達は、誰かが筆をおしとどめ、一切の記
述を差し控えたのであろうと推測される。

米

小町82¹ 小町82² 小町82³ 小町82⁴ 小町82⁵ 小町82⁶ 小町82⁷ 小町82⁸ 小町82⁹ 小町82¹⁰ 小町82¹¹ 小町82¹² 小町82¹³ 小町82¹⁴ 小町82¹⁵ 小町82¹⁶ 小町82¹⁷ 小町82¹⁸ 小町82¹⁹ 小町82²⁰ 小町82²¹ 小町82²² 小町82²³ 小町82²⁴ 小町82²⁵ 小町82²⁶ 小町82²⁷ 小町82²⁸ 小町82²⁹ 小町82³⁰ 小町82³¹ 小町82³² 小町82³³ 小町82³⁴ 小町82³⁵ 小町82³⁶ 小町82³⁷ 小町82³⁸ 小町82³⁹ 小町82⁴⁰ 小町82⁴¹ 小町82⁴² 小町82⁴³ 小町82⁴⁴ 小町82⁴⁵ 小町82⁴⁶ 小町82⁴⁷ 小町82⁴⁸ 小町82⁴⁹ 小町82⁵⁰ 小町82⁵¹ 小町82⁵² 小町82⁵³ 小町82⁵⁴ 小町82⁵⁵ 小町82⁵⁶ 小町82⁵⁷ 小町82⁵⁸ 小町82⁵⁹ 小町82⁶⁰ 小町82⁶¹ 小町82⁶² 小町82⁶³ 小町82⁶⁴ 小町82⁶⁵ 小町82⁶⁶ 小町82⁶⁷ 小町82⁶⁸ 小町82⁶⁹ 小町82⁷⁰ 小町82⁷¹ 小町82⁷² 小町82⁷³ 小町82⁷⁴ 小町82⁷⁵ 小町82⁷⁶ 小町82⁷⁷ 小町82⁷⁸ 小町82⁷⁹ 小町82⁸⁰ 小町82⁸¹ 小町82⁸² 小町82⁸³ 小町82⁸⁴ 小町82⁸⁵ 小町82⁸⁶ 小町82⁸⁷ 小町82⁸⁸ 小町82⁸⁹ 小町82⁹⁰ 小町82⁹¹ 小町82⁹² 小町82⁹³ 小町82⁹⁴ 小町82⁹⁵ 小町82⁹⁶ 小町82⁹⁷ 小町82⁹⁸ 小町82⁹⁹ 小町82¹⁰⁰

斑鳩宮の焼失

二月二十二日

聖徳太子が推古三十年（六二二）に薨去す

水て数年後、一、それは、推古朝（五九三）

六二八）の末頃のことであったろうか。斑鳩寺

（現法隆寺）が再建されて、金堂の中央に安

置された根本本尊の釈迦三尊像がまぶしいは

かりの光を放った。

だが、太子崩後二十年ばかりの年月が流水

た時、こともあううに、斑鳩の里が戦場

と化した。

皇極二年（六四三）十一月一日、蘇我入鹿

は小徳巨勢徳大臣等を遣わし、聖徳太子の嫡

子である山背大兄王らを不意に斑鳩に襲わせ

た。

山背大兄は、妃や子弟等をわけて隙を見て

逃げ出し、生駒山に隠れた。

そんな混乱の最中、斑鳩宮あたりには火の手が上

がった。巨勢徳大臣らが火を放ったのだった。

その後、山背大兄王は、現法隆寺西院伽藍の塔内

に帰して、斑鳩寺に火を入り、延焼をまぬがれた。

藤原上 153^P 焼失 焼いてなくすること。
聖徳太子伝秘記 3714^P
カン7826 イカル

町田 351^P
3642^P - 3/2 同文

3608^P - 8/4
斑鳩寺 被災の後
寺地を定めず (宮でない) 新ヤ 11-244^P
タイトル 4288^P - 1/3
4292^P
紀下 252^P

終に子弟・妃妾と一時に自ら經きて首
をくくつて俱に死せられた。
大兄王らの自決^{（蘇我入鹿、斑鳩宮を襲う）}へ山背
こうして、斑鳩寺^{（現法隆寺の西院）}の
東側にあつた斑鳩宮は焼失した。
なお、一般には、皇極二年十一月一日に、
斑鳩宮は、一字残らず全焼した。
ように解されがちであるが、
夢殿の前身にあたる建物は焼けなかった、と
伝える書物がある。（「法隆寺」町田甲一、
時事通信社、三五一頁参照。第七十章入斑鳩
宮の項において既述）
聖徳太子伝秘記にこう記されてい
る。
「怒鹿大臣焼失上宮王院之時者、更不云焼
夢殿、其文殿等悉焼失了、又殿之跡今南大門
前田也」
というのである。
（「法隆寺境内平面図」参照）
あるいは、
陰暦十一月一日の北風が強い日に、斑鳩

H5.1.31
H11.9.4(土)

3,715P

えんはら まねがわら 藤原上153°
③3713 延焼 253° 延焼 253° 八角 40° 44° 1/2 ④4045-2/2 八角 40° 45° 1/2
③3717-17 ③3707-17 八角 40° 44° 1/2 八角 40° 45° 1/2
町田70に因り

宮の南大門あたりにあった文殿(文庫)等は
悉く焼失したか、奇しくも夢殿の
前身に当る建物(四角であつたとも、八角で
あつたともいう)は、出火地点より北側に
あつたので、類焼をまぬがれた。
寺境内平面図参照

米

③3628-2/2

446

図

八

法

隆

③3628-1/2

(南門)

聖徳太子の姿を写した ③3721^P-2/

9分14 ③3641^P-1/2

同文^P-2/

くせ ③627^P
救世

所田 102^P

3716^P-1/4

③3642^P-2/2
西院 ③3714^P4分
11分

紀下556^P
11分 349^P

夢殿の本尊 救世観音菩薩像

天平年間 僧行信等は斑鳩宮跡の荒
廢をなげいて仏堂を造る運動をおこし、やが
て「上宮王院」を造営した。靈異記に「大和
国鵜聖徳王宮」と記すのがこゝで、今の法隆
寺東院であり、中心の仏堂を夢殿とよぶ。日
本書紀(下)日本古典文学大系、岩波書店、五五
六頁。「法隆寺」所田甲一、時事通信社、三
四九一参照。第七章「斑鳩宮」の項において既述
す。そして西院金堂本尊の「釈迦三尊像」
日薬師如来像と共々、法隆寺における極めて
重要な尊像が「聖徳太子の姿を写した」とい
伝えられる東院夢殿の「救世観音像」は「夢殿
観音像」である。寺では「クセ」とよんでゐる。写真
もつとも、この「救世観音像」は、天平時
代に僧行信等によつて再建された東院の本尊
として安置されてゐるが、しかし東院復興以

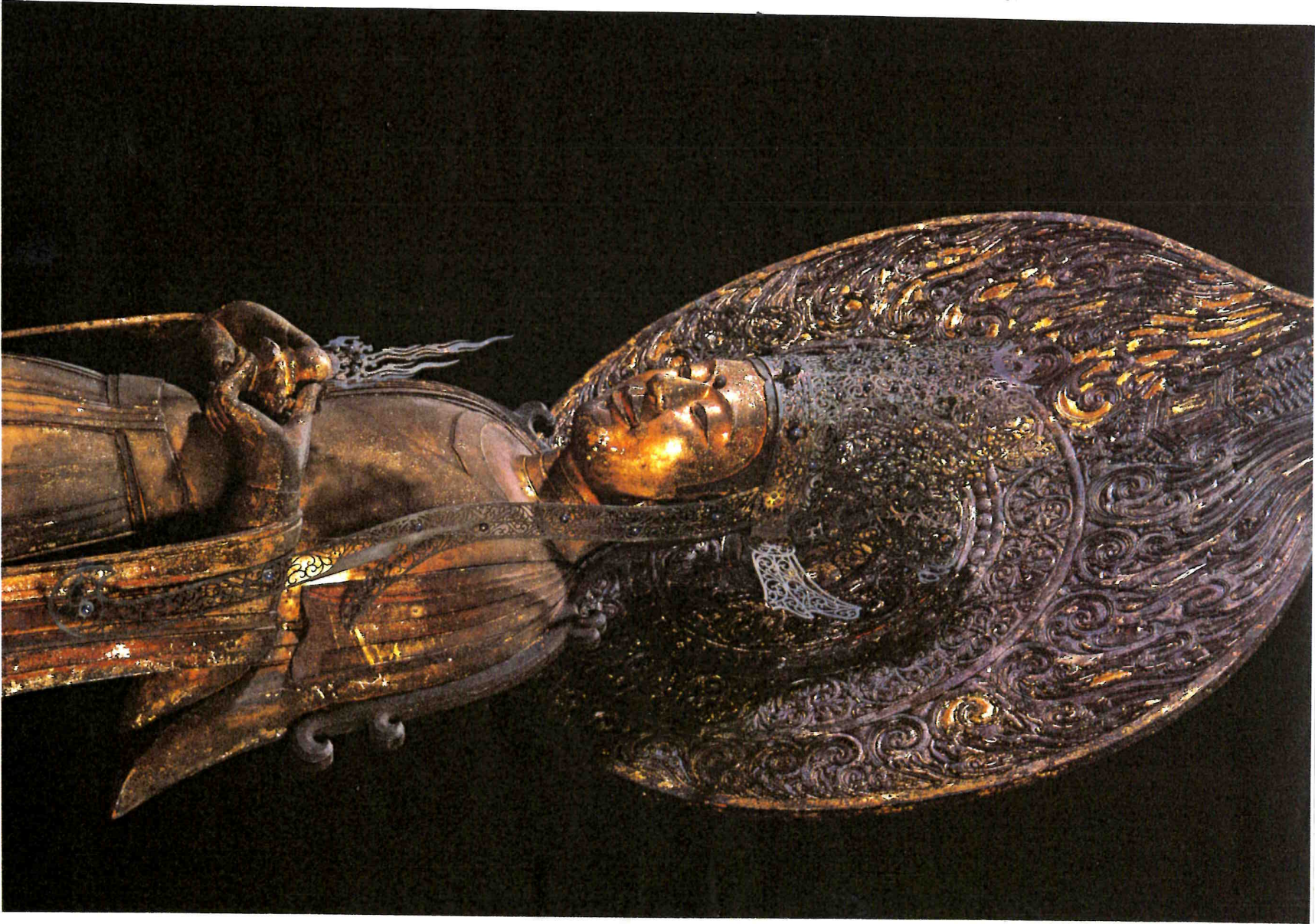
所田 102^P
寺では
クセとよんで
ゐる

③3720^P-1/2
17分

図版 660
661
662 参照

カ-
右員全通
大玉招載
下2m

3,716^P - 2/4



1304
『古色大和路』
1404
聖眞図版 660 法隆寺
曹殿 救世観音像
1304
1987年9月
平成24年10月29日発行
218頁
部分

カラー

左頁の右側

上・下段にまたがり

掲載下さい。

上・左・下に限

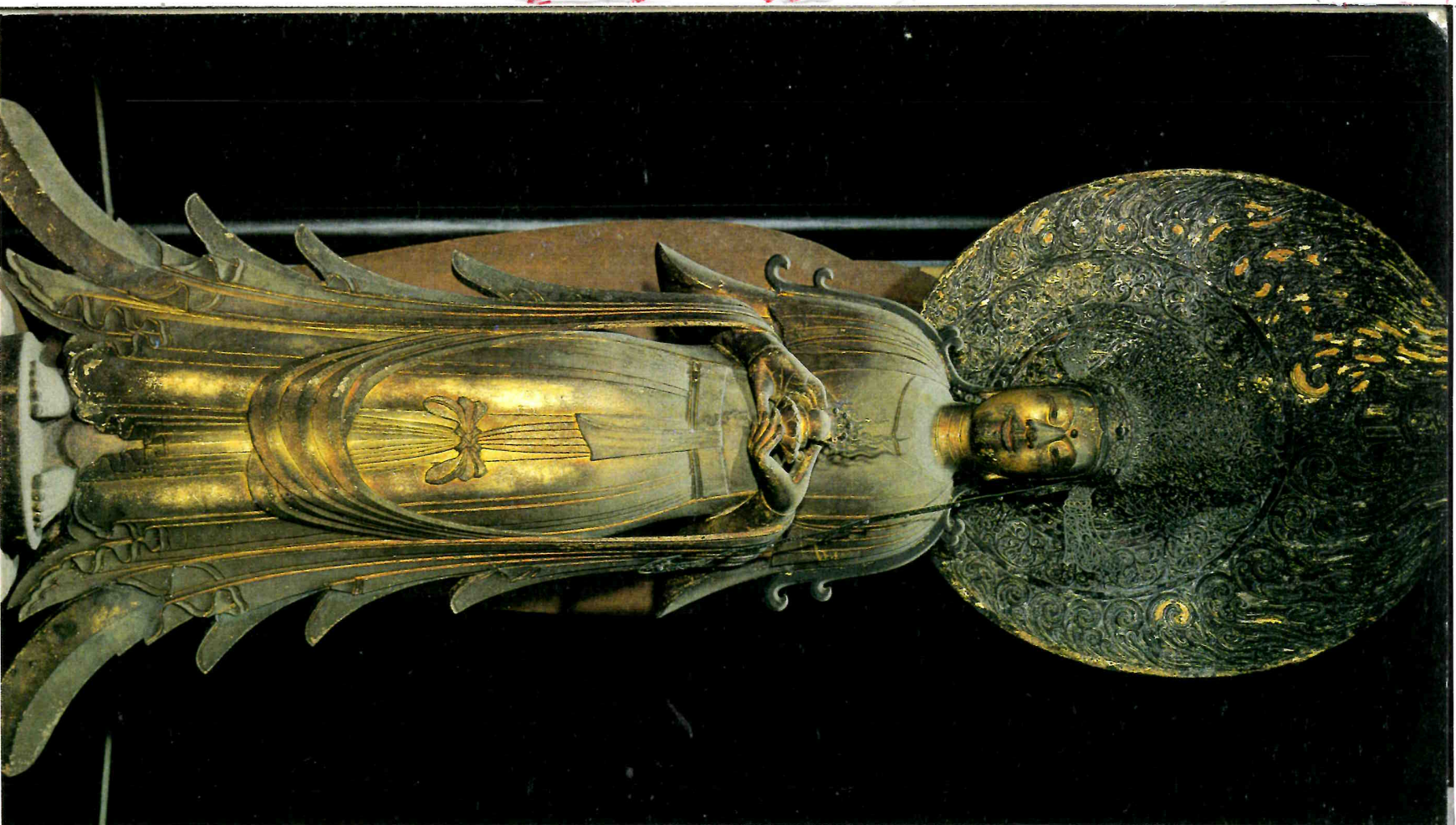
一杯はあいて

掲載お願いします。



3,716^p - 3/4

まわりの黒に合わせて下さい。



カギ

カギ

1366

1466

弘明の見た 見かけの山河原由雄 主婦と生活社 平成7年刊行の改訂版 27頁参照
蓮の花 (蓮台) までも 樟の一枚で作られている

空襲版 661 法隆寺 夢殿 救世観音像 (木造 1199cm) (国宝)

像高 179.9cm

3668

321

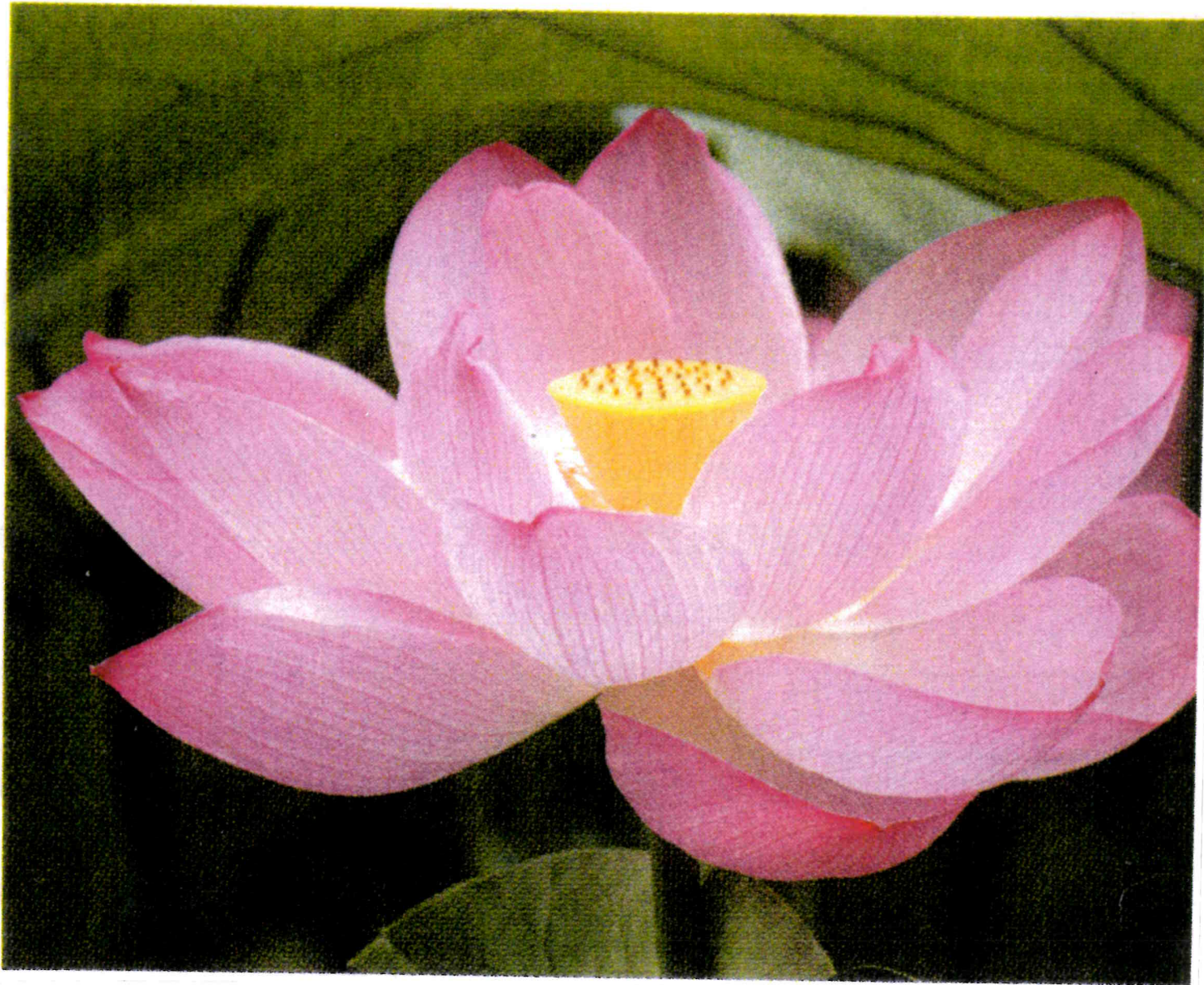
3,716^P - 4/4

・カラー

・左頁の左下に、
配置。

・左へ大きくはみ出し
掲載下さい。

・暗くならないように
(明るく)お願い
します。



・ 下の様な蓮を自分で
撮る。撮るつもりだが
花後 9 今年のはみずき
花 11 八スの花も綺麗。
H29(2017)8.1

14 QG

はす

写真図録 662 蓮

11QG 右側の (うえの「のはみずき」はす
(上野不忍池蓮))

13 QG

あかめまとはる みかみこういち

『スズンとハスの世界』 赤沼敏春・宮川浩一 (株)エムピージェー 2010年7月16日発行 79頁参照 322^P

③3713 皇極二年(643)11月1日
 ③3717 皇極二年(643)11月1日
 ③3714 皇極二年(643)11月1日
 ③3715 皇極二年(643)11月1日
 ③3716 皇極二年(643)11月1日
 ③3717 皇極二年(643)11月1日
 ③3718 皇極二年(643)11月1日
 ③3719 皇極二年(643)11月1日
 ③3720 皇極二年(643)11月1日
 ③3721 皇極二年(643)11月1日
 ③3722 皇極二年(643)11月1日
 ③3723 皇極二年(643)11月1日
 ③3724 皇極二年(643)11月1日
 ③3725 皇極二年(643)11月1日
 ③3726 皇極二年(643)11月1日
 ③3727 皇極二年(643)11月1日
 ③3728 皇極二年(643)11月1日
 ③3729 皇極二年(643)11月1日
 ③3730 皇極二年(643)11月1日
 ③3731 皇極二年(643)11月1日
 ③3732 皇極二年(643)11月1日
 ③3733 皇極二年(643)11月1日
 ③3734 皇極二年(643)11月1日
 ③3735 皇極二年(643)11月1日
 ③3736 皇極二年(643)11月1日
 ③3737 皇極二年(643)11月1日
 ③3738 皇極二年(643)11月1日
 ③3739 皇極二年(643)11月1日
 ③3740 皇極二年(643)11月1日
 ③3741 皇極二年(643)11月1日
 ③3742 皇極二年(643)11月1日
 ③3743 皇極二年(643)11月1日
 ③3744 皇極二年(643)11月1日
 ③3745 皇極二年(643)11月1日
 ③3746 皇極二年(643)11月1日
 ③3747 皇極二年(643)11月1日
 ③3748 皇極二年(643)11月1日
 ③3749 皇極二年(643)11月1日
 ③3750 皇極二年(643)11月1日
 ③3751 皇極二年(643)11月1日
 ③3752 皇極二年(643)11月1日
 ③3753 皇極二年(643)11月1日
 ③3754 皇極二年(643)11月1日
 ③3755 皇極二年(643)11月1日
 ③3756 皇極二年(643)11月1日
 ③3757 皇極二年(643)11月1日
 ③3758 皇極二年(643)11月1日
 ③3759 皇極二年(643)11月1日
 ③3760 皇極二年(643)11月1日
 ③3761 皇極二年(643)11月1日
 ③3762 皇極二年(643)11月1日
 ③3763 皇極二年(643)11月1日
 ③3764 皇極二年(643)11月1日
 ③3765 皇極二年(643)11月1日
 ③3766 皇極二年(643)11月1日
 ③3767 皇極二年(643)11月1日
 ③3768 皇極二年(643)11月1日
 ③3769 皇極二年(643)11月1日
 ③3770 皇極二年(643)11月1日
 ③3771 皇極二年(643)11月1日
 ③3772 皇極二年(643)11月1日
 ③3773 皇極二年(643)11月1日
 ③3774 皇極二年(643)11月1日
 ③3775 皇極二年(643)11月1日
 ③3776 皇極二年(643)11月1日
 ③3777 皇極二年(643)11月1日
 ③3778 皇極二年(643)11月1日
 ③3779 皇極二年(643)11月1日
 ③3780 皇極二年(643)11月1日
 ③3781 皇極二年(643)11月1日
 ③3782 皇極二年(643)11月1日
 ③3783 皇極二年(643)11月1日
 ③3784 皇極二年(643)11月1日
 ③3785 皇極二年(643)11月1日
 ③3786 皇極二年(643)11月1日
 ③3787 皇極二年(643)11月1日
 ③3788 皇極二年(643)11月1日
 ③3789 皇極二年(643)11月1日
 ③3790 皇極二年(643)11月1日
 ③3791 皇極二年(643)11月1日
 ③3792 皇極二年(643)11月1日
 ③3793 皇極二年(643)11月1日
 ③3794 皇極二年(643)11月1日
 ③3795 皇極二年(643)11月1日
 ③3796 皇極二年(643)11月1日
 ③3797 皇極二年(643)11月1日
 ③3798 皇極二年(643)11月1日
 ③3799 皇極二年(643)11月1日
 ③3800 皇極二年(643)11月1日

前にはどこに安置されていたのか、まったく不明であり、法隆寺のなぞの一つであるという。へ「法隆寺」町田甲一、時事通信社、一〇二頁、三五三頁参照。
 救世観音像は、もともと斑鳩宮に安置されていたのでなく、どこか別の所にあったから、皇極二年十一月一日に焼失しなかったのだろうか。だが、その後どうなったか、本尊とされたのであろうか。

聖徳太子薨去後、一頃、斑鳩宮の夢殿（夢堂ともいう）の内に安置されていたのか、これも知らない。つまり、

皇極二年（六四三）十一月一日の斑鳩宮炎上の時、北風の風下にあった文殿（文庫）などは悉く焼失したが、——風上に位置していた夢殿におよび、救世観音像には、幸いにも災禍が及ばなかった。

ということなのではなからうか、とも想像できない。

H5.22
H11.9.4(注)

日本の歴史(2) 読者40'

そうつ 僧都 1290 天つき 改行 3718 天つき 改行 2034 協侍 4569 棒 4625 11月 993 蓮台 小林 843 返り花 367 狂い花 返花 町田 113

法隆寺東院(斑鳩宮)の本尊、救世観音像は、反花の蓮台部まで、も樟の一枚をもち、
釈迦三尊の両脇侍をそのまま独立させて、単尊
の菩薩としたような様式を示している。
文献を見てみると、天平十一年(733)東院縁起によれば、天平十一年(733)に行信僧都により、東院の造営を行なった時、その仏殿の八角円堂に太子在世中に、くらいた、御影の救世観音像を安置したと云う。
② また、天平宝字五年(761)のいわゆる「東院資財帳」には、「上宮王等身観世音菩薩像志願金薄押」という記載がある。
世観音像を指していることは疑う余地がない、といふ。(「法隆寺」町田甲一、時事通信社、一〇二一一三頁参照)
救世観音像は、古くから秘仏として信仰され、へこの像をみると、法隆寺が焼ける、
と云い伝えられてきた。明治初年に日本の国宝調

「法隆寺」町田甲
105頁

うずたか
堆い

3,719^p

改行

てんえ
てんい
天衣 1540^p

同文 3721^p-3/4

査^さ宣^{かん}となつた米人フエノ口サらの国宝指定の
調^{てう}査^さを、かたく拒^{きよ}否^ひした。
しかし、ついに、国の力で夢殿の厨子の扉
かあけられた。
像^{ぞう}は十数社の絹につつまれ、いかもその上
には千年のほにりかうお^{たか}く積もつてりた。
その像に巻かれた絹を、たんねんにほぐしてゆ
くうち、像の一部があらわれ、黄金の光が
燦然と輝いた。
こうして現われたのが、夢殿観音像として
有名な仏像である。
夢殿観音像は、よほど古い時代から絹につ
つまれていたらしく、江戸時代ごろの彫刻よ
りも保存がよく、宝冠の金具の一部が失われ
てゐるほかは、まったく完全で、金色にかが
やいてゐる。
法隆寺夢殿の本尊である、^{ゆめどの}夢殿観音像は、^{えんどう}金堂の釈迦三尊
像よりもさらに面長で神秘的な顔つきである
全体とこごとつてみて、一分のすきもない
鋭い彫刻法であり、両腕から垂れてゐる天衣

おふひ彼の助手だった
(岡倉天竺)

3.720^{P-1/2}
三溪 573 杏仁 あんず(杏子)の実の核の肉

天つき
改行

改行

天つき改行

改行

は新迦三尊の脇侍よりかはげくはぬか
えっていいる。こうした諸氏は、この像が釈迦
三尊像よりいっそう古い様式のもので、聖徳
太子が存命であつた時代までさかのぼりうる
のではないかといいわけていいる。(「日本の
歴史」(2)飛鳥と奈良、読売新聞社、四一頁、
「法隆寺」町田甲一、時事通信社、昭和六十二年十月発行)の五頁参照)
□ーかし一方、眼は見開かれた杏仁形(涙滴
形)ではあるが、同じカーブの弧を上下に合
わせたごとき単調なものではなく、この表現
は金堂本尊より少し進んでいりようだと
いわれ、また、七世紀後半(白鳳時代)まで
くだるのではないかと考える学者もでてき
たという。(「法隆寺」町田甲一、時事通信
社、一一六頁。「日本の歴史」(2)読売新聞社、
四一頁参照)
■尚、こにちこの像は、救世観音菩薩像
とよばれていいるが、しかし実は観音としての
特色はなにもない。
・観音菩薩像は、宝冠に化仏という小さな如

像

激

③ 3678¹/₉ 日本の上史(2)読表 40¹/₉ 華師 秋加三年月歴表 資料 22.581¹/₉ ④ 3677¹/₉ 16.7 on
 座 27.13 辛亥年 16.7 on (辛亥年 16.7 on 2年 651年)
 小 報加三年月歴の2つ? ⑤ 3678¹/₉ 2/2 ⑥ 3667¹/₉ 1/2 ⑦ 3678¹/₉ 1/2
 ⑧ 3678¹/₉ 1/2 ⑨ 3678¹/₉ 1/2 ⑩ 3678¹/₉ 1/2 ⑪ 3678¹/₉ 1/2 ⑫ 3678¹/₉ 1/2 ⑬ 3678¹/₉ 1/2 ⑭ 3678¹/₉ 1/2 ⑮ 3678¹/₉ 1/2 ⑯ 3678¹/₉ 1/2 ⑰ 3678¹/₉ 1/2 ⑱ 3678¹/₉ 1/2 ⑲ 3678¹/₉ 1/2 ⑳ 3678¹/₉ 1/2 ㉑ 3678¹/₉ 1/2 ㉒ 3678¹/₉ 1/2 ㉓ 3678¹/₉ 1/2 ㉔ 3678¹/₉ 1/2 ㉕ 3678¹/₉ 1/2 ㉖ 3678¹/₉ 1/2 ㉗ 3678¹/₉ 1/2 ㉘ 3678¹/₉ 1/2 ㉙ 3678¹/₉ 1/2 ㉚ 3678¹/₉ 1/2 ㉛ 3678¹/₉ 1/2 ㉜ 3678¹/₉ 1/2 ㉝ 3678¹/₉ 1/2 ㉞ 3678¹/₉ 1/2 ㉟ 3678¹/₉ 1/2 ㊱ 3678¹/₉ 1/2 ㊲ 3678¹/₉ 1/2 ㊳ 3678¹/₉ 1/2 ㊴ 3678¹/₉ 1/2 ㊵ 3678¹/₉ 1/2 ㊶ 3678¹/₉ 1/2 ㊷ 3678¹/₉ 1/2 ㊸ 3678¹/₉ 1/2 ㊹ 3678¹/₉ 1/2 ㊺ 3678¹/₉ 1/2 ㊻ 3678¹/₉ 1/2 ㊼ 3678¹/₉ 1/2 ㊽ 3678¹/₉ 1/2 ㊾ 3678¹/₉ 1/2 ㊿ 3678¹/₉ 1/2

$$\textcircled{+} 3678^{\circ} - 5/9$$

③ $3678^h - 1/9$
下 同 日 81
立 像 力

3,720^P - 2/2

1. 糸100%の2つ? $3678^{1/9}$ ⑦ 3667

④ 367¹² 367¹⁶ on
座¹² 座¹⁶ 年表 OK (辛亥年) 始 始 2年 651年)
- 左 右 (2) / 小 初 加 三 年 像 日 753年
⑤ 367¹⁸ 1/9

③ 3678-1/9

来像をつけているのが普通である。

孝徳天皇の白雉二年。西暦
 645年。イナカキ

天五一年の製作と思われ
四十八体仏
現

左東京国立博物館蔵)の中の、辛亥年(六五

一年の銘のある像にも、すでに宝冠に化仏が

ついでに、はつきりと観音像であることか

わ
か
る。
戊子年銘小秋迎像、像高六七寸。
ゆめどの
ほんぞう
たいほうぞうてい

ところが、夢殿の本尊や、法隆寺大宝蔵殿

の止利式金銅菩薩立像には、
他仏がとりつけ

うわていない。そこで現在のところでは、た

た菩薩像といふだけで、正確に何の菩薩に属

法隆寺 閻中定象・高田良信 学生社、二三七頁 參考

1
て
い
る
か
と
い
う
こ
と
は
~~分~~
~~ら~~
な
い
の
で
あ
る

(1) 日本
(2) 読売新聞社、四一頁

西院金堂新迦三尊像。開供に似た格。〇後

(1) 夢殿の本尊は、聖徳太子の生前の姿

(2) 止利金銀菩薩立像
一
六子母の銘を有す
小

親邊三尊像と箱之水に
る金銀像一付、
銀手

蕉子宿禰大臣の生前の姿

たの
の
た
は
な
か
ろ
う
か
か
か

だが、あえて他社とリ
ーをたか
たの

知小

両象には、^いい^し生^まれた^け化^り仏^{ぶつ}を^つ付^けな^かつ^たの^だら^うと^を想^{さう}察^{さつ}し^よめ^る。

626 34
-610 -18
16 16

3,721^P-1/5

3678^P-2/9

(4) 口 釈迦三尊像が焼損してから十六年後の
ろ うと なか ったの であろ う。
● それ 以降、鞍作島は、一 切、仏像を 作
小 片に 砕 けて しま った。
口 釈迦三尊像は、火 堂内に 安置され ばか りの
炎 上し、 金 堂内に 斑鳩寺(若草伽藍)が
月 三十 日の 夜 半に、 斑鳩寺(若草伽藍)が
(3) それ から 三年 後の 推古 十八 年(一六〇) 四
執 行 行 な わ れ た。 (葉師如来像光背銘参照
法隆寺の本尊 口 葉師如来像の 開眼式が
● や 加 へ 鞍作島は、大和国 斑鳩寺(若草伽藍
の 本尊 口 釈迦三尊像 にも 作り 始 め た。
(2) 推古 十五年(一六〇七) に、大倭国(肥後国
項、大倭国(肥後国) 法隆寺の本尊 口 葉
師如来像の 製作に 着手 した。
● や 加 へ 鞍作島は、大和国 斑鳩寺(若草伽藍
の 本尊 口 釈迦三尊像 にも 作り 始 め た。
(1) 鞍作島(止利仏師)は、推古 六年(五九八
の 第 10 表 参照。 一部 重複)
つ い て、 次 の よう に 解 釈 し て み た い。(巻頭
全 く 定 か な ら な い も の、 法隆寺の 仏像に
ま った さい

大カマ 2444 小カマ 605
漢 容 吳 葉
ゲン ユウ

ひえ 天ネ ③3678-7/9 15行 同反 ③3719

3,721^P-2/5

大カマ 1/5
小カマ 1/5
同反 ③3718 2/5

同反 ③3678-8/9 ③3678-1/9 ③3678-2/9

● 推古三十四年（六二六）五月二十日に、蘇我馬子宿禰大臣が薨じた。我馬子宿禰大臣の死去を悲し
み、曰く小釈迦三尊像を作らば（正真図版644参照）
（5）此れが契機となつて、鞍作鳥は創作意欲を
取り戻し、楠を用いた木彫彩色の菩薩像を
いわゆる曰く百済觀音を作つた。
（6）また、↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑
を思ひ、全身全霊を打ち込んで、今は亡き聖徳太子
樟（楠）の一材から、
人音像を彫りあげた。
と云われ、
聖徳太子の姿を写した
東院夢殿の曰く救世觀
音像を彫りあげた。
● 救世觀音像は、西院金堂の曰く釈迦三尊
像より、さらには面長で神秘的な顔容であ
り、全体どこをとつてみても一分のすきも
ない鋭い彫刻法で、両腕から垂れてゐる天
衣は曰く釈迦三尊像の脇侍よりも激しくは
ぬかえてゐる。
● 一、この像の眼は、見開らかれた杏仁形

東院は僧でない 3713¹¹ 3719¹³ 3721¹⁵ 蘇和子の死前 626年

（と） 20^{1/2} 11

（一）（漢）形）ではあるが、同じカーブの弧を
 上下に合わせたゴとき単純なものではなく
 西院の金堂本尊（釈迦三尊像）よりも少し
 進んだ形式とみられる。
 といふことなのだ。ううと想像される。
 私（が）が（が）らなかつたら（が）（が）が太子の尊像を後世へ伝えようか
 戦作鳥は、こころした気概をもつて、一へん不惑に救世観音像を
 作つたものと思われろ。
 仏（が）な（が）お、不幸に（が）て火災が發生した場合には
 仏像を素早く運び出せるように配慮して、戦
 作鳥は、百済観音にも救世観音にも楠（樟）
 の木彫といたのではなかうか
 部（が）が失われ（が）て、い（が）る、とい（が）うのだから、
 （一）（皇）極二年（六四三）十一月一日の斑鳩宮
 炎上の時、人々は焔が迫るなか、
 吐（が）き（が）に（が）て救世観音像（木彫の仏像）を、延焼
 して（が）てくる恐れのない安全な所へお移した。
 （二）（と）ころ（が）か、その混乱の際に、救世観音像
 の空冠の金具の一部が行方不明になつてしま
 った。
 とい（が）つた経緯があつたのかも知れない。

3721^P 4/5

1字アキ

3721^P 2/4 1157

3720^P 2

ただしこの時^{とき}夢殿^{ゆめどの}が焼損^{しょうそん}を免^{まぬ}れたのか
それともなす術^{すべ}も無^なく類焼^{るいしょう}したのか
た点^{てん}については今^{いま}後の究明^{きゅうめい}を待^{まち}たいで

★

①夢殿^{ゆめどの}の本尊^{ほんぞん}（西院^{さいいん}金堂^{きんどう}）
釈迦^{しやくか}三尊^{さんぞん}像^{ざう}の両脇^{りやうわき}
侍^しに似^にた様式^{ようしき}の像^{ざう}は下^{した}聖徳太子^{せいとくたいし}の生^{せい}前^{ぜん}の

②止利^{しり}式^{しき}金銅^{きんどう}菩薩^{ぼさつ}像^{ざう}（戊子^{つちのえねのこ}年^{ねん}の銘^{めい}をもつ小釈^{しょうしやく}

迦^か三尊^{さんぞん}像^{ざう}と称^{しょう}され^ている金銅^{きんどう}像^{ざう}は、蘇我^{そが}

馬子^{うまこ}宿禰^{すくね}大臣^{おほみ}の生^{せい}前^{ぜん}の姿^{すがた}を写^{うつ}しとつて

なかつたのかも知^しれないで
先^{まづ}述^のの通^とり百濟^{くだり}觀音^{くわんおん}像^{ざう}には化仏^{けぶつ}がある

というのだから――①②の像^{ざう}には下^{した}意^い識^{しき}

して、化^け仏^{ぶつ}を付^つけなかつたような印象^{いんしょう}を受け

★

H28(2016)9.13(火)

H30(2018)9.23(日) ~ (2回)

H31(2019)3.31(日) ~ 4.1(5回)

令和2(2020)4.23(木) ~ 4.26(4回)

令和元(2019)9.9(月)

令和2(2021)1.24(日) ~ 1.25(4回)

3,721 - 5

下1/4
1/4

考案を待たない
⑦ 3684 - 1/2

*

信行信の時か?

明なから、建て直されたものと考えられる。て配置されていものなから、いつか不

と推察される。

但し、現在の口夢殿は、南北方向を中心軸と

口救世観音像が安置されてい。へ皇極二年(六四三)以前から、夢殿内に

思われる。

と言い伝えられることになったのだろう、と

世観音像を斑鳩宮の災禍以降、

十一月一日の斑鳩宮炎上直前に、誰かが口救

さらに述べると、恐らく皇極二年(六四三)